
夢観幻君

天川時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢観幻君

【Nコード】

N8626E

【作者名】

天川時雨

【あらすじ】

夢観―千里眼の一種―の力を持った天上家に生まれた主人公。数年前主人公の父親である天上家当主が事故死したことから、主人公の生活は崩れ始めた…【更新不定期です！】

プロローグく夢影く（前書き）

この小説は天川が以前書いた『夢幻想』と言う小説と同時期に「千里眼」と言うキーワードのもと執筆したもので、言わば姉妹作（？）と言うところです。『夢幻想』も掲載させていただいているので、よろしければそちらものぞいてやって下さい、（^^）

プロローグ 夢影

僕はただ泣いていた。

ただ愛しくて、切なくて。嬉しくて、でも悲しくて。未だかつて経験したことのない感情に、僕はただ泣くしかなかった。

息をするのが苦しくて、この季節には少々暑苦しい床の中で身体を丸めるようにして縮まっている。そしてこの胸の苦しさが持病の喘息の発作のせいでないことを僕は知っている。

夢から覚めたその瞬間から目に涙が溢れて止まらない。

僕は夢の中であの人に会ってしまった。

会いたい、会いたい、会いたい。

その想いだけが今僕の中に溢れて止まらない。

僕が持っているものであれば、なにを犠牲にしても構わない。あの人にもう一度、会うことが許されるのなら、僕はこの命だって捧げよう。多くは望まない。ただ一目、もう一度だけあの人に会えさえすればそれで良い。

優しい目をしたあの人、すらりとした後ろ姿が綺麗なあの人、こちらを向いて微笑んだあの人。全てが、あの人のも全てが、今の僕には愛らしい。

僕は泣いている。

ただただ愛しくて、切なくて。嬉しくて、でも悲しくて。

僕はただ泣くしかなかった。

ブログく夢影く（後書き）

感想、評価などいただけましたら励みになります！よろしくお
願い
します m ((m

一、鳥籠―前―

「ごほっ、ごほっ…がっ」

暗い小さな和室。右手の方には障子があつて、外からのぎらぎらした陽光を和らげている。閉め切った室内はかなり暑苦しいが、こんな無様な姿を人にさらすよりよほど良い。

「ごっ、ごほっ…ごほっ…」

元々気管支が弱いので咳など珍しいことではない。喘息持ちではあるが、最近ではそれもようやく症状が軽減してきたので、今では心配するに足りない程度のものだ。今も少し苦しいが、しばらくすれば治まる。

「紫雲様、紫雲様！」

障子に小柄な人影が映る。使用人の誰かが薬やら何やらを持ってきたのだろう。人影が障子に手を掛ける。

「来るなあっ！」

咄嗟に、そう叫んでいた。

人影の伸ばした手が一瞬躊躇する。

「下がれ…大丈夫だから…」

やっとの思いでそれだけ言った。

こんな姿、他人の前にさらしたくはない。

人影はまだどうすべきか迷っているようだったがしばらくすると障子の前から姿を消した。

ふっと息をつく。それと同時に先程まで抑えていた咳が一気にどの奥にこみ上げてきた。

「ごほっ、ごほっ…ごっ…がっ…ごほっ…」

思わず身体を縮める。しばらくこうしていれば…

―ガッ、ガタッ

突然狂ったように鳴き叫ぶ蟬の声と痛いほど眩しい陽光が、どつと部屋の中に押し寄せた。

何者かが障子を開け放ったのだ。

大きな木が繁る日本風の広い庭を背にして人が立っていた。逆光でその顔は見えなかったが、長い黒髪でそれが女だと知れる。そして僕はその女が誰であるのかを知っている。こんなことをするのは、あの女しか居ない。

「仕事よ、紫雲」

どこまでも無表情な声。

それは昔、僕が母親と呼んでいた女の声。

女は冷笑を浮かべていた。

「何しているの？ みつともない。それより、早く着替えてちょうだい。園山様から依頼が入ったの。知ってるでしょう？ 今度出馬なさる政治家の」

やっとの思いで上体を起こす。次いで目の前にいる女に、下から睨む形で目を向けた。

「嫌だ」

まだ胸が苦しかったが、はっきりとそう言った。

「何言ってるの、あなたは。馬鹿なことを言っていないで、さっさと着替えたらどう？」

いつものことだが、この女の口調は僕をとてども苛立たせる。

「今日は夢観はしない。断れ、そんなもの」

吐き捨てるように言う。

「駄目よ。さあ、早く着替えて」

「僕は今日は何も観たくない。それに選挙前にここへ依頼を持ち込んで、何を見るつもりだ？ 僕は薄汚いことに手を貸したくはない」

「違うでしょう？ いつも言ってるじゃない、あなたの夢観を、千里眼の能力を必要としている人が居るの。過去や未来までも見通せるのは、一族の中でもあなたしか居ないのよ」

この女は何を言っているのだろうか。言っている意味が分からない。否、わかりたくもない。

「僕は薄汚いことに手は貸さない」

「まだそんなことを…」

「出て行け」

僕は静かに、力強く言った。

「紫雲、あなた…」

「うるさい！出て行け！」

僕は側に置いてあった本を女に投げつけた。次いで立ち上がり、勢いよく障子を閉めた。

「いいわ」

障子の向こうで女が声を荒げる。

「あなたは私の許可がなければ一生ここから出ることは許されないのよ。いつか今日、この時を後悔する日が来るでしょうよ！」

影が遠ざかるとともに、僕は障子の前に崩れるように座り込んだ。
「言われなくても…」

わかっている。僕は鳥なんだ。がっちりとした鉄格子の籠の中で飼われている鳥であることくらい、わかっている。

一、鳥籠前―（後書き）

感想、評価、お願いします♪

二、鳥籠―後―（前書き）

一ヶ月以上あいてしまいました…申し訳ないです（汗）

二、鳥籠―後―

三年前、一族最強の夢観とうたわれた父さんが事故で亡くなった今、この天上家の当主は僕だ。

しかし僕はあの女に逆らえない。一生。今は未成年だからということもあるけれど、決してそれが理由の全てではない。保護者だからと言う以上に僕を縛り付けるものをあの女は持っている。

父さんが亡くなってから僕はこの屋敷を出ることは許されず、夢観を義務づけられた。

高校には通っていない。

中学には通っていたので辛うじて幾人かの友達が居たが、今ではその子たちがどうしているかもわからない。

僕は障子に寄りかかって目を閉じた。

瞼の裏にはまだ、夢のあの人が残っている。ふわりとした軟らかな笑顔が心地よい。手を伸ばせばまだ届きそうな気がするのに。

あの人に会いたい。

愛しくて、愛しくて、しょうがない。

あの人に会うためなら、僕は何だって犠牲にできる。

しかし僕はどんなにそれを願っても、決してかなわないことを知っている。

次第に胸が苦しくなる。

呼吸をする度、喉の奥がぜいぜい音を立てる。

発作か。

さっきあんなに興奮したんだ、無理もない。喉が痛い。無機になつて大声を出すんじゃないかった。

目から涙が溢れる。

苦しい。

苦しくて苦しくて、壊れてしまいそうだ。

笑顔が、あの人の笑顔が目の前に浮かんでは消える。

手を伸ばせば届きそうで、でもそれがかなわぬことを知っていて、それでも僕は手を伸ばした。震える僕の手は空を切り、同時に僕は畳の上に倒れ込んだ。

閉め切った室内はかなり暑苦しい。それでもこんな無様な姿を人前にさらすよりはましだと、改めて思った。

外には狂ったように鳴く蟬の聲が延々と、どこまでも響いている。

三、懐―前―

僕は父さんが死んだ日のことを今でもありありと覚えている。

三年前、夏の暑い日だった。天気予報で、その日が数年ぶりの記録的な猛暑であることを綺麗なお天気お姉さんが僕たちに告げていたことを覚えている。確か、ヒートアイランド現象というものに関与しているらしかった。庭の蝉たちも、例年よりうるさかったと思う。ともかく、その年の夏は何もかもがいつもとは違って見えた。違ったと言えば、父さんがそうだった。あの日一番チガッタのは父さんだ。

僕は父さんとの会話の一言一句に至まで、正確に思い出せる。

「お前は特別な子なんだよ」

「特別……？」

当時中学三年生だった僕は、縁側に座る父さんの隣で首を傾げた。そんな僕を父さんは柔らかく見つめた。

「ああ、お前は特別なんだよ」

「何が特別なの？チカラのこと？」

父さんはゆっくりと首を横に振った。

「それもある。お前や私が持っている夢観、つまり千里眼の能力だな。これを使って多くの人を助けることも傷つけることもできる。どう使うかはお前次第だな」

「それで、何が特別なの？」

父さんがもったい付けるのと夏の暑さのせいで、僕は少し苛々していた。

「それはな」

父さんは軒下に吊された風鈴を見上げた。音色がとても涼しげだった。

「今ここで私の隣に座って、私の子として、私とこうやって会話しているお前、つまりお前がお前自身であることそのものが特別なん

だよ」

「なにそれ」

僕には父さんが言った意味がわからなかった。

困り顔の僕の頭を父さんはその大きな手で不器用に撫でた。そのせいで、髪の毛がくしゃくしゃになった。

「何があっても、お前がお前でいてくれれば、私はそれで良い。私にはいつでもお前が特別なんだから」

「よくわからない」

「それで良いんだよ。まだ、今は…」

三、懐―前―（後書き）

よろしければ感想、お聞かせください♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8626e/>

夢観幻君

2010年10月14日15時09分発行